

(1) 小児の心身障害早期発見並びに診断治療基準の 設定に関する研究

分担研究者 鴨 下 重 彦
(自治医科大学)

心身障害児をめぐる問題は広くかつ深い。その早期発見、診断、治療基準の設定を意図した事例の蒐集整理と検討を行い、総合判定と措置に関する方法の確立を期することを目的とする当研究班の研究は、全国各地から毎週全国心身障害児福祉財団療育相談センターを訪れる患者を中心に進められた。

患者の内訳は、精神薄弱、脳性麻痺、微細脳損傷、自閉的傾向、てんかん、言語発達遅滞、未熟児網膜症などが主であり、又これらを併せ持つ重複障害児も少なくなかった。大部分の患者は既に地元の医療機関や相談施設において療育指導を過去において受けたか、現在も受けつつあるが、猶より総合的な判断を求めて来所するものと思われる。これらの1例1例を各研究協力者が、それぞれの専門的立場から、充分な時間をかけて詳細に観察し、診断、特に原因的診断を検討し、又各障害児が最も問題としている点について相談に乗り、更に総合的に今後の療育方針を立てることが根気よく続けられて来た。このようなセンターの行き方は極めてユニークなものであり、全国の心身障害児にとっても存在意義は決して小さくないであろう。併し精神薄弱の早期発見だけを考えても、原因疾患の数は多く、極めて困難な問題であり、今後も地道な努力が続けられねばならない事は云うまでもない。以下は各研究協力者のこの一年間の努力の中から生れた研究成果を簡単に要約したものである。

◇ 神経筋障害児・先天代謝異常児 寺尾 寿夫

28例の Down 症候群の脳波を検討し、臨

床的に痙攣発作がみられないにも拘らず、5例に棘波が認められ、脳波異常の頻度が必ずしも低くないことを明らかにした。

◇ 神経障害児

福山 幸夫
丸山 博
横田 淳子

てんかんを合併する精神薄弱として重要な結節性硬化症について、新生児期から存在する白斑を発見することが早期診断として最も重要であることを強調した。本症は優性遺伝の疾患とされているが、経験例の9割は散発例であった。

◇ 精神薄弱児

上出 弘之・佐々木正美
神保 真也・太田 昌孝
栗田 伝

通常は記録することが極めて困難な自閉症児の覚醒時脳波について周波分析を行い、より自閉的症状の強いものと、より精神発達遅滞の強いもの、の2群に分けて比較すると、前者は正常群もあまり差がないのに対し、後者は明らかに徐波成分が多いことが明らかにされた。

◇ 心臓障害児

榊原 仟
高尾 篤良

本センターの性格からして心臓障害を一次の訴えとして来る者はなく、又他の心身障害児に偶然に合併する心奇形の頻度も一般に比

して特に高いわけではないが、今後の早期発見、診断基準をまとめ、各疾患別に治療基準を解説した。

◇ 視覚障害児

小沢 博子

先天白内障は、小児視覚障害の原因上、未熟児網膜症に次ぎ第2位を占める。また、白内障の型により、胎生期のいつの頃の障害がある程度推定でき、また全身異常に伴う“syndrome cataracts”の多い点は、先天異常の研究の上できわめて重要である。視覚の面からは、随伴する他の眼異常、視性遮断性弱視の存在等により必ずしも予後良好と限らず、また手術に伴う合併症も多く、今後さらに手術の適応、治療方法に関する研究をすすめるべきである。

◇ 運動機能障害児

堤 直温
浅田 美江
児玉 和夫

早期治療と治療効果の判定の為の Milani-Comparetti, Gidoni 診断チャートと Vojita の検査法の導入により機能訓練の効果があがることを紹介。自閉的傾向の児、精神薄弱を合併する児の取扱いが問題とされた。

◇ 歯科疾患児

上原 進

従来殆ど顧られることのなかった領域であるが、心身障害児には齶蝕その他治療を要する事例が多いことと、例えば高口蓋など口腔外科的奇形の発見により障害児の早期診断に役割を果し得る点が強調された。

◇ 聴力障害児

柴田 貞雄
志村 泰子
矢崎 有子

効率的な訓練を行う為に従来行われている

訓練法をまとめて表示し、それにより個々の事例の問題を容易に把握出来るようにした。

◇ 情緒障害児

山崖 俊子
小池恵美子

154例の障害児のうち、自閉症が認められ、精神科医によっても取扱われた56例について、医師によって診断や指導法が異なる点があることを指摘し、これを更に分析して、治療者の態度によって、障害児の自閉性は変り得るものであることを結論した。

◇ 特殊教育対象児

下田 功
林 友三

全国療育相談センターにおいて、教育相談を受けた学齢児童の中で就学猶予をしている児童及びそれらと同程度と思われる児童で就学している者を対象として、就学の条件についての比較研究を中心課題とした。

◇ 重症心身障害児

小林 提樹
秋山 泰子

生後5カ月より46才までの多重複障害児(者)100例について、診断名、障害の内容、指導内容などを分析し、問題点を明らかにした。

◇ X線検査

大越 健一
深野 君子
八木 慎二

脳性麻痺、知能障害、不随意運動などを伴う事例のレントゲン検査について、機械の構造、固定法、鎮静法など日常の苦心を述べ、検査室内の色彩や音楽をきかせるなど、具体的な改善の工夫を提案した。

◇ 臨床検査

星野 辰雄
杉本 幸子

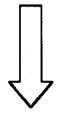
全国療育相談センターを訪れる障害児の約
1/3が、染色体異常と何らかの関係があるとす
れば、染色体検査を見逃がすことはできな
い。今後は、国立病院医療センター研究部遺
伝疫学室との提携により、全国療育相談セン

ターとしての技術並びに設備等をより一層強
化拡充して、研究成果を発揮することが緊要
である。

◇ 歯科治療

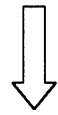
上原 進

歯科治療時の患児の行動様式を検討した。
脳性麻痺についてみると在宅児の方が施設入
所児よりも齲蝕が多い傾向がみられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



心身障害児をめぐる問題は広くかつ深い。その早期発見,診断,治療基準の設定を意図した事例の蒐集整理と検討を行い,総合判定と措置に関する方法の確立を期することを目的とする当研究班の研究は,全国各地から毎週全国心身障害児福祉財団療育相談センターを訪れる患者を中心に進められた。